

西真寺 寺報

平成二十九年 春号

■浄土真宗と禅宗の違いについて（前編）

新年挨拶

慈光照護のもと、ご門徒の皆様にはますますご健勝にて念佛相続に御績勲のことと、お喜び申し上げます。

昨年は入寺して間もなく、養父と養母である西真寺住職と坊守を亡くし、考える間もなく葬儀ならびに報恩講を厳修する機縁となりました。ご存じの通り私は昨年の六月から一人で西真寺に住んでおりましたが、自坊の葬儀ならびに年忌法事やお盆、秋彼岸以外は、新潟市のお寺に出勤しておりました。その為に、皆様には多くの不安とご不便をおかけしました。

秋以降、村上市内の法中寺院と新潟の寺院併せて十ヶ寺の報恩講に出勤する傍ら、西真寺報恩講に法話を頂いた丸山文雄師のお寺に伺い約四ヶ月間に渡り、お西の声明作法のご指導を頂きました。

そして年末には、京都本山に計三回講習と検定試験を受けさせて頂きました。忙しい時は午前中に新潟で法事を二件勤めた後に午後に村上に移動して葬儀を勤めたり、その逆のケースも有りましたが、何とか二足の草鞋を問題無く修了できました。これも、皆様方のご理解と温かいご支援の賜物と深く感じております。

新年を迎えて、昼間は誰も居ない日も多々あり皆様には引き続きご迷惑をお掛け致します。しかしながら、家族と話し合いの結果、今年の四月から家族全員、西真寺で生活をする事に成りましたので、ここにご報告させて頂きます。

今年も寺族共々宜しくお願ひ申し上げます。

釋直徳

禅宗は、自力の仏教で、浄土真宗は他力の仏教と言われますが、実際のそれぞれの内容について説明したいと思います。

禅宗の基は北魏の時代にインドから来た菩提達磨を開祖として中国の道教の思想と結びつき中国で広まりました。その為、禅は中国独自の仏教と言われています。日本の禅宗は、宋で禅を学んだ栄西が広め臨済宗を開いたのが始まりとされますが、日本に禅を最初に伝えたのは、法相宗の道昭です。後の能忍が戒律を無視した為、栄西はこれを批判し、臨済宗を開きました。

栄西の臨済宗の特徴は、戒律を重視し、公案と坐禅に専念することにあります。また権力者との接近を積極的に採用し、東大寺の勧進職にも就いています。鎌倉時代の武士は新興の権力者であり、また無に目覚めると覚悟が生まれ、死をも恐れないとされました。その為常に死を覚悟する武士が臨済宗に傾倒したのです。

一方、栄西の系譜で修行した道元は、自ら宋に渡り曹洞宗を学び日本で永平寺を開きました。栄西の臨済宗との違いはひたすら坐禅のみを重視し、権力者を嫌いましたので農村に広めました。禅の実践は、精神性を高める手段の他、「見性成仏」、「不立文字」とされ、自己の心性に仏の心を体験し、その境地は経典などに示される言葉を超えて伝わるとされています。お釈迦様の真似をして人間のお釈迦様になるという精神性に特徴があります。

鎌倉時代に栄西と道元と同じ比叡山で修業したのが親鸞聖人です。比叡山に行くと常行堂があり、禅の修行をするお堂と念佛三昧をするお堂が回廊を隔てて分かれています。比叡山では、禅も念佛も修行方法の一つであつたわけです。法然上人が日本における淨土教の祖師であると思われるかもせんが、平安時代に源信という僧侶が『往生要集』という浄土教の内容を書き残しています。皆さんよくご存じの『源氏物語』に出てくる「横川

の聖」が源信で当時比叡山延暦寺の横川におりました。

源信の念佛往生の教えは仏を金じ、念佛を唱える觀想の念佛でした。この念佛の教えを誰でもどんな階層でも念佛を称えることで救われるとして広めたのが法然です。淨土教の思想は、二世紀後半インドの龍樹、天親、中国の曇鸞、道綽、善導に貫流し日本の源信、法然から親鸞によつて伝えられたものです。源信の觀想念佛、法然の称名念佛に対して親鸞の念佛の違いは信心にあります。念佛を唱えることで救われるのではなく、すでに救われていることに気づかされる信心に救済の根拠を見出しました。また、親鸞は悪人正機で有名ですが、この思想は法然が基です。そして法然は生涯戒律を守りましたが、親鸞は肉食妻帯で有名です。

ここで禅宗と淨土真宗の違いを整理してみます。禅宗は戒律を守り、淨土真宗は戒律を守らないという見方もありますが、禅宗が戒律を重視している思想であるとは言い難いと思います。日本仏教において戒律は結果的に重視されませんでした。親鸞聖人が肉食妻帯を公にした頃、禅宗の高僧たちは、公にせずに裏で妻帯していたのです。隠語で大黒様とは禅僧の奥さんのことです。

また、禅宗は修行するが淨土真宗は修行しないという見方もあるでしょう。しかし、比叡山では念佛も坐禅も同じ常行三昧です。確かに禅は高度で知的な修行です。しかし瞑想によつて集中力を維持できる人は稀でしょう。故に瞑想法は多様化し、あいまいで偽物も多く存在しているのも事実です。言葉を立てない禅宗に対して、一つの境地を哲学的に言葉で表現しようとする淨土真宗も難解で分かりにくい思想です。本来は実生活における生き方にこそ修行の実践の場があるのでないでしょうか。（次号に続く）

■現代の佛教用語

「三昧」



■西真寺 行事のご案内

新年会総会二月二十六日（日曜日）
前住職前坊守一周忌法要七月初旬予定
報恩講 十月九日（祝日）予定

合掌

「贊沢三昧」や「温泉三昧」、「かに三昧」などの余暇に熱中してのめり込む様子を表現する意味として使われますが、本来は仏教の修行に使われる言葉です。インドのサンスクリット語で「サマー・ディ」といい、心を集中して精神力を高める意味で使う言葉です。比叡山の常行堂で行われる念佛三昧は、阿弥陀仏の周りを不斷念佛の状態で九十日間不眠、食事をとらずに回り続けます。極限状態に陥ることで仏を観ようとする修行法なのです。

■立派

立派な家だとか、出世して偉くなつたから立派、有名な進学校に入学したから立派という使い方をしますが、家は古くなれば立派とは言えなくなりますし、肩書も退職すれば過去の栄光、偏差値が高くても人格は立派とは限りません。諸行無常です。仏教の「立派」とは「立破」から當てられた言葉です。自分が立てた課題を自ら実証し、他の人からそのことに対する批判されても立脚地が定まつていて他人の理論を破ることができる。立脚地を定めその道を求める者は自分の道を立証できるのです。

■編集後記

十二月の本山の試験で出遭つた人たちは皆さん立派な僧侶でした。ほとんどの方が寺と別の職業の兼業で、生活費は寺以外の仕事で得て、休みを法事に当てて体が休まる事がない。過疎地の場合もつと深刻で、寺の維持費が毎年減る状況の為、別の仕事の給料を寺に寄付している。ボーナスや退職金を使って寺を修復してなんとか維持している。ほとんど寺の仕事はボランティアのようです。しかし、皆さん明るく求道心を持つて生きているのです。